

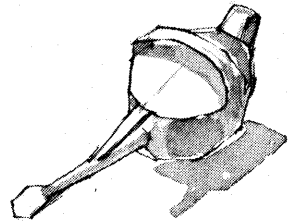
遊びの心理学 (一)

遊びの心理学というテーマを与えられたが、ここでは主として幼児の遊びに関する最近の心理学的研究成果のいくつかをとりあげて述べ、それらと幼児の教育との関連について考えてみたい。

遊びと周期性

遊びが自由で自発的な、そして喜びや楽しみの源となる活動であることは、遊びの根本的な特徴の一つとしてくり返し説かれてきたところである。しかも、それは子どもたちのよく知っている環境の中で、なじみの遊具や材料が自由に使えるときに生ずる活動でもある。

石川 信一



それでは、このような環境の中で、そのような遊びの対象物と交わりながら幼児が遊んでいるとき、その遊び行動はどのような経過を示すであろうか。そこでは、他の場面においては見られない特質が子どもたちの行動を貫いている、ということはないであろうか。

この問いかけに対して、少なくともひとり遊びにおいては、「周期性」という特質が、と答えたのが、ドイツの心理学者トローメと彼の共同研究者たちの一連の研究（一九五六）である。

トローメらは、一歳から七歳までの幼児七〇名について、彼らが家庭あるいは施設（一―四歳児）および幼稚園（四―七歳児）において、前述のような条件のもとでひとり遊びをしていると

きの行動（二〇名の幼稚園児については、集団の中で遊んでい
るときの行動）を、一人の子どもについて合計二時間ないし二
時間半観察した。行動の経過は、すぐ次にあげる事項が記録か
ら読みとられるようにできるだけ綿密に記述され、また同時に
一分間隔で時間の経過を記録していった。そして、このように
して得られた記録は、

(一) 遊びのさいの活動と運動（すわる、立ち上がる、走るなど）
(二) 遊びに使われた遊具

(三) 遊んだ場所

(四) 遊びの行動型（遊具に熱中して取り組む静的な行動と、主
として運動的な行動ないし遊具や興味あるいは活動をすぐ変
える「活発な」行動）

という四つの観点を浮き立たせるように簡約して記述しなお
された。

結果は、とくにひとり遊びの行動において、これら四つの観
点のそれぞれに周期的な交替の現象が見られることをはっきり
と示したのである。すなわち、子どもたちの行動の中に「同じ
活動単位が、二回ないし数回[反復して現われ]（活動の周期性）
」「さまざまな遊具が、二回ないし数回同じ順序でくり返し用い
られ」（遊具の周期性）、子どもたちは、「へやの中のいろいろな

場所で、二回ないし数回同じ順序でくり返し遊び」（場所の周期
性）そして「運動的な遊びと遊具での遊びは二回ないし数回交
互に現われ、しかもそれぞれの遊びをする時間はほぼ等しい」
（行動型の周期性）ことが確認されたのである。そこで次に、
各形式の周期性の実例を、四―七歳児の記録から選んで述べて
みよう。

(一) 「活動の周期性」の実例

八・四五 彼女はもっている鎖を空中で振り回す―それから
それを延ばす―もう一度それを空中で振り回す―
それに指を通す―またそれを延ばす。

八・四六 またそれを空中で振り回す―それに指を通す……

(二) 「遊具の周期性」の実例

八・四一 彼女がへやにはいつてくる―わくつき馬車に手を
かける―それを自分のうしろに引き寄せる―それ
をほっておく―机のところに行く―家のおもちゃ
の箱にちよっと手をつっこむ―またわくつき馬車
に手をかける―それを自分のうしろに引き寄せる
―またそれをほっておく―机のところに行く―そ

こで家のおもちゃの箱の中をかきまわす―それからわくつき馬車にもう一度手をかける―へやの中を引き回す。

八・四六 また机のところに行く―そのままそこにいる―家のおもちゃの箱を開けはじめる―机の上に家を並べる……

(三) 「場所の周期性」の実例

○・三八 人形をまた車の中に戻す―窓ぎわの腰かけから走り去る―へやの中を走る―また窓ぎわへ行く―ドアのところへ行く―また窓ぎわへ―またドアのところへ―また窓ぎわへ―

○・四二 立ちどまったままでいる―人形を車から取り出す。

(四) 「行動型の周期性」の実例

九・二九 人形をのせたわくつき馬車をへや中引き回す―隣室へ走って行く―またはいってくる―人形と車をいじりまわす、など。(六分間の活発な活動)

九・三五 絵本を見たいようすを示す。(二分間の静的な活動)

九・三七 絵本を開く―また隣室へ走って行く―また戻って

くる―絵を書こうとするが、絵本にも目を向ける―窓ぎわに走って行く―机に走ってくる―そして決心がつかないまま机のあちこちに立ってみる―また窓ぎわに走って行く―私のところへくる、など。(六分間の活発な活動)

もちろん、各形式の周期性が現われる頻度は一様ではなく、またそれぞれに個人差や年齢差が見られるが、一般的には、年少幼児ほど周期性が強く現われる。たとえば、レーアが分担観察した一―二歳児では、平均して全観察時間の四〇・九パーセント、すなわち一〇〇分のうち四〇・九分に「活動の周期性」が見られたのに対して、シャーピッツが分担観察した四―七歳児では、平均七・一パーセント(個別観察)と四・四パーセント(集団観察)にすぎなかった。しかし、年長幼児においては、年少幼児には見られない特殊な形式の周期的活動の現象、いわば「活動の周期性」のヴァリエーションがいくつか認められた。また、「遊具の周期性」の割合は、一―二歳児では平均五一・三パーセント、つまり遊具の一〇〇回の使用のうち五一回は周期的に使用されたのに対して、彼らが示した「遊具の周期性」とは異質のそれが見いだされた四―七歳児では、六四・六パー

セントに達した。

さらに、年長幼児では、「場所の周期性」は「遊具（ないし興味）の周期性」と組み合わされていることが明らかにされた。

最後に、「行動型の周期性」は、一―二歳児では「運動的遊び」と「遊具での遊び」の周期的な交替としてとらえられ、平均して一時間あたり一〇回の交替が生じたのに対して、四―七歳児では、それは「遊具と熱中して取り組む活動」と「活発な活動」の周期的な交替として起り（観察場面の空間的な狭さと関連している）、平均して一時間につき五回であった。しかも、交替が生ずる時間間隔は、それがほぼ等しい間隔で生ずる一―

二歳児のばあいとは異なる形式を示した（実例参照）。

また、一―二歳児を観察したレーアは、このような周期性ないしリズムの現われを妨げる要因として、

- (一) 同時に与えられる遊具が少なすぎるか、多すぎることを
- (二) 運動空間が狭すぎることを
- (三) おとなの干渉が多いことを
- (四) 子どもの気分が不快な状態にあることをあげている。

なお、集団の中での遊びのさいには、このような周期性はごくわずかしか認められなかった。ちなみに、古川ら（一九六八）

が幼稚園児の集団での自由な遊び活動を観察した研究において、「定期的反復型」とよんでいる行動類型は、トーマラのいう「活動ないし行動の周期性」と同じ現象を認め、これを類型化したものと思われる。

それでは、トーマらは、これらの成果をどのように解釈しようとするのであろうか。トーマは、生活体の内的過程によって決定される行動には周期性ないしリズムがあるのに反して、外的な環境刺激によって決定される行動は、非周期的かつ散発的である、という仮説を立て、自分たちの観察結果はこれを実証したものと解釈する。

すなわち、彼によれば、遊びの全体を合成している子どもたちの個々の動作とか行為は、不規則に、全く偶発的に、また全く外的な場の力に基づいて継起するのではなく、同じようなことをほぼ等しい間隔で活動させる内部法則に基づいて継起していくところが「大」なのである。いいかえれば、遊び行動は、それが周期的な形式をとって現われるかぎりでは、外的な誘因、すなわち遊具や遊びの場所の条件によって支配されるところよりも、いわば波打ちぎわの波動のように経過する内的な「推進力」によって決定されるところが大きいのである。そして、子どもの行動が鼓舞や命令ないし禁止によって干渉されない「自

由な」遊び場が、このような周期性を成り立たせる前提である。したがって、集団の中での遊び行動においては、周期性の力学に集団成員の相互規制のような社会心理学的要因が層を成して重なってくるので、周期的交替の現象はそれだけ少なくなる。

さて、トーマはさらに、みずからの定式は発達の諸現象についても適用されることを主張する。すなわち、彼によれば、周期の長短にかかわらず、周期性の形式をとって現われる発達上の現象は、内因的に規定されており、散発的ないし反応的に現われる現象は、外因的に規定されているところが相対的に大きいのである。発達が「波動の形をとって」あるいは「律動的な交替のうち」に、「ら線的に」経過する側面をもつことは、すでにゲゼルやブーゼマンなどの発達心理学者によって強調されてきたところである。しかし、トーマはここで、人間の発達の原理には、自己調節の原理に基づくこのような周期性とともに、いわば外因的調節の原理としての社会化が加わることを指摘する。そして、彼によれば、周期的な自己調節作用と各種の形式の非周期的な調節作用が、行動の中でどのように関与しているかを、彼らが行なったような行為の構造の精密分析を通して追跡することが、新しい形式の発達心理学をつくりだすことにな

る。ちなみに、彼らはその具体的な成果の一つとして、四一六歳児の行動とその経過の形態には、根本的な構造変化が示されることをあげている。

ところで、トーマらのこのような発見とその解釈は、幼児の教育にとってどのような意義をもつであろうか。幼児の教育は、彼らの遊びを中心に、営まれねばならない、というフレール以来の主張には、遊びが、自由に、自発的に、熱中して、楽しく、しかも創造的に取り組まれる活動であり、そのような活動としての遊びこそが、この時期の子どもの心身の諸能力をもつともよく発達させる、という洞察がその根底にあった。そしていま、この洞察には、幼児の心身の諸能力は、つねに彼らの遊び活動のさまざまな可能性の間の律動的な交替の中で発展してゆく、というトーマらの洞察がつけ加えられねばならない。幼児の遊び活動の発展は何よりもまず、「ら線のモデル」にもっともよく従うのである。

このようにして、みずからのもつ要求を満たしている遊びにおいては、子ども自身が遊びの対象物を自由に選ぶことができ、またそれらとかわり合う仕方においても、選択の自由が許されていなければならない。その上、いくつかの活動の周期的な交替を妨げることのない「遊びの空間」が、あらかじめ用意さ

れている必要がある。この意味において、園内には、そこでの遊びを禁止している場所や設備のないことが望まれるし、あるとしても最小限にとどめるべきなのである。さらに、そのような「遊びの空間」には、それぞれの子ども固有の活動のリズムに相応した遊びができる、「遊びの低位空間」がいくつも構成されていることが要求される。

園の中には、仕切りのあるコーナー、植え込み、坂道などのような変化に富んだ遊びの場所が用意されていないなければならない。そしてまた、子どもたちの活動の固有のリズムを妨害し、かく乱しないためには、このような「遊びの空間」とともに、十分な「遊びの時間」も用意されている必要があるし、子どもたちの遊びを突然に打ち切ることも避けなければならない。

さらに、津守（一九七〇）が、「幼稚園の生活は、全体としては集団であるが、その中では個人の生活が十分できるようになっていないなければならない。まわりで他の子どもたちが他のことをしている、一人で自分の作りたいものを作るようになっていくことがたいせつである」がゆえに、「子どもがひとりで行える空間と時間が必要である」ことを説くとき、われわれはトーマらとともに、遊びそのものが本来、そのような要求をみずからのうちにもっていることを強調しなければならない。

また、リーバーマン（一九六五）が充実した遊びをしている幼児の特徴の一つとして、遊びの時間の間に、その子どもがいろいろなグループに加わり、それぞれのグループの一員として遊び活動をする、そして自分自身の選択によって、あるいはグループの成員の側からの悪意のない示唆によって、グループに出入りすることのできることをあげている。彼女のこの指摘が正しく得たものであることは、容易に理解できるであろう。トーマに従えば、集団の中での遊びにおいても、ひとりひとりの子どもが、みずからの固有のリズムに従って活動できることが、遊びのもつ要求にかなうことになるからである。さらに、レーアが指摘したように、遊びの周期性ないしリズムは、遊具や材料の過少や過多によって、また運動の制限によって妨げられるとすれば、それらの最適な量や最適な運動空間の広さが、あらためて問われなければならないであろう。これに加えて、トーマ自身も強調するように、幼稚園や保育園の遊びの教育にとっては、保育者によって組織される遊びの時間と自由な遊びの時間を量の上で有効に調和させることだけではなく、いつ、子どもあるいは子どもたちが、外部からの刺激を必要としているのか、もう一度彼らの自己活動に、任せることのできるのはいつなのか、あるいはいつ任せるべきなのか、というその

時点を察知することも必須の要件でなければならない。

最後にわれわれは、トーマらのこの成果をとおして、保育者の「教育的な指導が遊びを損うことなしにつねに可能である」とすれば、それは保育者が遊びの要求のうしろに身をおくばあいだけである」(シヨイール、一九五四)ことを強調しておきたい。

(弘前大学教育学部)

引用文献

- Lieberman, J. N. 1965. Playfulness and divergent thinking. *J. genet. Psychol.*, 107:219-224.
Scheuerl, H. 1954. *Das Spiel*. Beltz.
Thomae, H. (Hrsg.) 1956. Untersuchungen über die Periodik im kindlichen Verhalten. *Z. f. exp. u. angew. Psychol.*, 3:1-43, 179-217, 331-380, 575-601.

古川敬子ほか 一九六八

『幼児の遊び活動に関する一研究』 保育学年報一九六八年

版 フレーベル館 一二—一三ページ

津守 真 一九七〇

『集団への適応とはなにか』 幼児の教育 六九卷 五号

二一—二五ページ